

研究報告

大角皿作りの一成形技法

望月 集

Syu Mochizuki

(陶芸作家、日本陶磁芸術学会会員)

はじめに

私は、陶芸作品を制作する際、[成形] [加飾] [焼成] と、それぞれの工程に多くの興味を持ち制作しております。特に草花の絵付けをした作品が多く (参考例 1, 2)、その絵付け表現の仕事が注目されがちですが、やはりそのベースとなる形は、

とても大切なものであります。絵付けと形は別々に存在するものではなく、一つの同じテーマの上に効果的に絡んで存在するものです。たとえば、今回、成形技法を紹介する角皿にしても、全体の大きな形をはじめ、その曲面の具合 (形や表情)、厚さやその縁の幅や表情に至るまで、作品における重要度は明白で、制作テーマに合わせて感じ考え、大きく形を触る段階から、微妙に整える段階まで、とても神経を使い制作しています。

さて、陶土による成形方法は、様々あります。このレポートでは、最近、私の制作の中で、実際行っている大角皿の制作方法を紹介します。

その作り方は、[ひも作り] [型打ち] [削り出し] の3技法の併用によるものです。この技法の特徴としては、まず、(セラローラーのような) 板状の粘土を作る機械を使わず、[ひも作り] によって粘土を大きな板状の形に作る事にあります。機械を使わないだけでなく、大きな



参考例 1



参考例 2

陶土の塊を菊練りする必要がありません。これは、特に強い力を必要としない事から、女性や年配の方にも有効かと考えます。私にとっては、一本一本ひも状の陶土を付け一体化していくこの作業の行為とそれにかかる時間の流れが、作品を思い創り出すのに、とても大切なリズムと時間を感じています。気持ちが一つ一つ入っていくのです。次に [型打ち]。今回の型は、発泡樹脂を使用しています。他、狙いによって石膏型も使用しますが、発泡樹脂は軽く、特に大きな作品の時に助かります。型打ちをする事によってをする事で、確実に意識的な大きな形を作り出すことが出来ます。型を幾度も試作しながら、また、微調整をして、より気持ちにじっくりくる形を作っているからです。そして、最後に [削りだし] の作業、つまり、生乾きの段階で作品テーマにあった最終的な形を削り出します。最終的な形と表情を決めます。

では、実際の制作工程を紹介しましょう。

[ひも作り]

- ・適当な太さ、長さのひも状の土を数本用意する。今回は、径 5cm 位。長さは、継ぎ足していけば良いので作業しやすい長さで。(図 1, 2)



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16



図 17



図 18



図 19



図 20

・用意したひも土を、合板の上に平たく押し伸ばしていく。おおよそ同じ厚さになるように。厚さ2cm位。(図3, 4)

・平たく押し伸ばした土の幅半分位を斜めに押しつぶす。これは、次のひも土をしっかり付ける為に、その接面を広くする意味がある。(図5)

・湿らせた布で斜めにした面を整える。(図6, 7)

・その面に、次のひも土を付けていく。(図8~10)

・同じ行為を作品に必要な幅になるまで繰り返す。(図11, 12)

・必要な幅になったら、ひも土同士が、より一体化する様に叩き均す。(図13)

・たたら板をあて、ワイヤーで切る。今回は、最終的に12mmの厚さにする予定なので、1回目は15mmに切る。(図14)

・上の切れ端を取り除き、絞った布を平にたたみ、粘土をしめるようにあてていく。四方から。(図15~17)

・同様に、ゴムベラでも行う。(図18, 19)

・再びワイヤーで今度は3mm厚に切る。(図20)

・ 十分な大きさの布で、全体を、
密着するように被う。(図21~23)



図 21



図 22



図 23

・ 合板を乗せ、挟んだまま裏返す。
(図24から26)



図 24



図 35



図 26

・ 返して上になった板を外す。同
時に、3mm 厚に切り取った粘
土を除く。(図27, 28)

・ 出てきた面も。前作業と同様に、
絞った布、ゴムベラで粘土をし
める。(図29, 30)



図 27



図 28



図 29

・ 型紙をあて、それに沿って、剣
先で切り、余分な粘土を取り除
く。(図31~33)

ここで使用した道具 (道具 1)



図 30



図 31



図 32

[型打ち]

・ 粘土を触らず、布をもって、型
の上に乗せる。(図34から37)



図 33



型打ち

図 34



図 35



図 36



図 37



図 38



図 39



図 40



図 41



図 42



図 43



図 44



図 45



図 46

- ・平たい木の板で叩き、粘土を型に密着させる。(図 38, 39)
- ・底面の角になる部分に濡らした布で拭き湿らせ、そこにひも土をひねりつけ、木べら等を使い平らな底面を作る。この作業をする事により、本焼き焼成時での形の歪みが少なくなる。

- ・四隅の角も同じ様に土を補充し形を作る。全体に四方からゴムベラをあてる。(図 40～45)
- ・このまま無風の空間で、数日置いておく。(図 46)



削り出し



図 47



図 48

[削り出し]

- ・程よく生乾きになったところで、型ごと裏返し、布を剥がす。(図47～51)



図 49



図 50



図 51



図 52



図 53



図 54

- ・全体の形を確認しながら、縁を削り形の輪郭を決める。(図52)
- ・縁の厚さを削り、内側の曲面を削り・・・形を仕上げる。(図53, 54)

・裏面も同様に。(図55)

・削った箇所を、濡れた布で表面をほんの少し戻し、ゴムベラをあて仕上げる。(図56~61)

・乾燥時に形が動きやすいが、縁の部分にラップをすると効果的である。(図62)

ここで使用した道具(道具2)



道具2



図 55



図 56



図 57



図 58



図 59



図 60



図 61



図 62

おわりに

今回紹介した成形技法は、とてもオーソドックスな成形法の組み合わせで、また時間もかかり、即席に作れる技法ではありませんが、このように、いくつかの工程を通して制作する中で、当初の意図的な構想と、そして展開次第では、それだけではない・・・時に偶発的な要因も取り入れながら、より「意」に、テーマに合った形を作り出していき事が出来ます。一見何気ない平面の皿形も、こうした成形法を通じてより充実し、面白い作品が出来るのです。